

平成 16 年度

第 1 回 湘南国際村青少年国際セミナー

Kanagawa Program of International Training (K-PIT)

報告書



平成 17 年 3 月 27 日 ~ 29 日

於：湘南国際村センター

財団法人 かながわ学術研究交流財団 (K-FACE)

目 次

はじめに	・・・ 3
講師・スタッフ一覧	・・・ 4
セミナープログラム	・・・ 5
セミナー概要	
特別講演「異文化とどう付き合うか？ ～食べることから考える～」	
・講演：松本 仁一（朝日新聞 編集委員）	・・・ 6
セクション 「地球家族 ～私の存在、あなたの存在～」	
・ワークショップ：「地球家族フォトランゲージ」	・・・ 8
・講義：細谷 早里（関東学院大学 助教授）	・・・ 10
セクション 「豊かさってなに？ ～安心できる世界～」	
・講義：勝俣 誠（明治学院大学 教授）	・・・ 12
・ワークショップ：「バングラデシュの開発を考える9つの方法」	・・・ 14
・講義：旦 祐介（東海大学 教授）	・・・ 16
セクション 「『目に見えないも』を考えよう ～グレート・アイディアズへのいざない～」	
・講義：江藤 裕之（長野県看護大学 助教授）	・・・ 18
調べて話し合おう・グループ発表・修了証書授与式	・・・ 22

はじめに

財団法人 かながわ学術研究交流財団(K-FACE)は、神奈川県国際交流拠点である湘南国際村を中心に活動する公益法人で、「地球の未来、人類の未来を地域の切り口で考える」を基本理念に、人文・社会科学分野の研究、国際的な視野を持つ人材の育成、学術・文化・芸術の国際交流、地域環境問題への取り組みなど、多彩な事業を展開しております。

平成15年度に策定された神奈川県の総合計画『神奈川力構想・プロジェクト51』において、「未来を担う人づくり」という政策課題が掲げられ、国際性豊かな、国際協力の精神と実践力を備えた人材を育てるという目標が定められました。これを受け当財団では、大学生・大学院生を対象としたセミナーで長年培ってきた国際教育プログラムのノウハウを活かし、青少年の国際人材育成のあり方について研究を進めてまいりました。そして、その研究成果を活用し、平成17年3月25日から27日までの2泊3日にわたり、高校生など65名が集い、第1回「湘南国際村青少年国際セミナー(K-PIT: Kanagawa Program of International Training)」を開催いたしました。

K-PITは異文化理解や国際情勢等をテーマとした大学レベルの講義の他、開発教育ワークショップやグループでの調査学習に重点を置き、参加者一人ひとりが主体的に学ぶことのできるようなプログラム構成になっています。また、高校の枠を超えて集まった熱意ある仲間と語り合い、教員や大学生アドバイザーと交流することで、参加者が自らの将来について考える際のヒントを得るチャンスとなります。さらに、会場である湘南国際村センターでは、国際会議や国際シンポジウムが頻繁に開催されており、参加者にとって「本物」の空気を感じながら過ごす2泊3日となります。

なお、セミナーの開催にあたりましては、各高校の先生方をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。



講師・スタッフ一覧

〔プログラム委員〕

委員長 勝俣 誠 (明治学院大学国際学部 教授)

江藤 裕之 (長野県看護大学外国語講座〔英語〕 助教授)

遠藤 晋 (神奈川県立向の岡工業高校 教諭)

佐久間 健一 (横浜国際女学院翠陵高校 副校長)

旦 祐介 (東海大学教養学部 教授)

細谷 早里 (関東学院大学経済学部 助教授)

〔特別講師〕

松本 仁一 (朝日新聞 編集委員)

〔ファシリテーター〕

出口 雅子 (ピナツボ復興むさしのネット)

木下 理仁 (神奈川県国際交流協会)

〔学生アドバイザー〕

飯塚 大輔

杉山 雅彦

タスタンベコワ クアニシ

野口 美奈

場馬 充

セミナープログラム

1日目 3/27(日)

- 13:00 : 受付
13:30 : 開会式
13:40 : 特別講演「異文化とどう付き合うか? ~ 食べることから考える ~」
松本 仁一 (朝日新聞 編集委員)
14:40 : 休憩
15:00 : セクション 「地球家族・私の存在、あなたの存在」
遠藤 晋 (神奈川県立向の岡工業高校 教諭)
佐久間 健一 (横浜国際女学院翠陵高校 副校長)
細谷 早里 (関東学院大学経済学部 助教授)
18:00 : チェックイン
18:30 : ウェルカム・パーティー
20:00 : 調べて話し合おう
22:00 : 就寝

2日目 3/28(月)

- 7:30 : 朝食
9:00 : セクション 「豊かさってなに? ~ 安心できる世界 ~」
勝俣 誠 (明治学院大学国際学部 教授)
旦 祐介 (東海大学教養学部 教授)
12:00 : 昼食
14:00 : セクション 「『目に見えないもの』を考えよう~グレート・アイディアズへのいざない~」
江藤 裕之 (長野県看護大学外国語講座〔英語〕 助教授)
16:00 : 休憩
16:15 : 調べて話し合おう
18:30 : 夕食
20:00 : 調べて話し合おう
22:00 : 就寝

3日目 3/29(火)

- 7:30 : 朝食・チェックアウト
9:00 : グループ発表
11:00 : 休憩
11:10 : 講評
12:00 : 修了証書授与式、フェアウェル・パーティー
13:30 : 解散

特別講演**「異文化とどう付き合うか？ ～食べることから考える～」**

講師：松本 仁一（朝日新聞 編集委員）

アフリカに8年ほど滞在した経験から、異文化を正しく把握するための方法について、「食べ物」という観点からお話をしたいと思います。

牛の血を飲む

マサイ族の遊牧生活を体験した際、牛の血を飲んだことがあります。彼らは朝飯として、若くて元気の良い牛から血液を1リットル採り、そこに牛乳を1リットル混ぜたものを飲むのです。「土から生えているのは食べてはいけない」というマサイ族に伝わるルールのため、野菜等は食べません。その当時、私は彼らの行動は不合理だと考え、「なんてバカなことをするのか」と思っていました。

しかし数年後、彼らが牛の血を飲むのは、ビタミンを摂取するためであることに気がつきました。年間降雨量が300ミリに満たないサバンナの大地では、野菜を栽培して食することは不可能に近いわけです。「野菜」ではなく「牛」に依存する生活様式は、環境的にも理にかなっており、牛の血を飲むことは生活の知恵なのです。

牛の血を飲むことは、多くの日本人にとっては「野蛮」、「不潔」、「未開」と解釈されることでしょう。しかし、マサイ族はそうしなければ生きられない環境にあり、そこから生まれた彼らの生活様式が、彼らの文化なのです。異質な文化に触れた時、「野蛮」や「未開」の一言で決めつけ、思考を停止したら、お互いの理解はそこで終わってしまいます。常に、「なぜなのだろう？」と考えることが重要です。

サルの肉を食べる

アフリカのガボンに取材に行った際、ある村の食堂で不思議な肉を食べました。食堂と言ってもメニューはなく、出されたものを食べるしかないのです。食後、そこにいた店員に「何の肉ですか？」と尋ねると、「サルの肉だ」という答えが返ってきました。首都であるリーブルビルの市場では、肉屋の軒下にサルが吊るされ、風に吹かれて揺れていました。現地の人たちはそれを見て、「うまそうだ」と言うのです。アフリカでの滞在が長く、味覚が「アフリカ化」している私でも、さすがにサルを見て「うまそうだ」とは思いませんでした。彼らはなぜ、わざわざサルを食べるのでしょうか。

その答えは、またしても自然環境にありました。年間降雨量が2000～3000ミリ(日本の2、3倍)の熱帯雨林では農耕ができず、魚の取れない地域は、森の中からタンパク源を得る必要があったのです。そのタンパク源がサルでした。このように、環境から始まる食文化がある。ここでもまた、最初から「野蛮」と決めつけずに、「なぜなのだろう？」と考え続けることで、彼らの生活の奥にある「文化」を初めて理解することができるわけです。

豚を食べない理由

湾岸戦争の取材を終え、現地スタッフと共に中華料理屋で慰労会を開催した時のことです。現地スタッフはイスラム教徒なのですが、イスラム教では「お酒」、「鱗のない魚介類」、「豚肉」を口にすることを禁じていますから、彼らはそれらの入った料理が分かるよう、お皿の

色を変えて欲しいと言いました。

しかし、食事が始まると、彼らはエビを食べながらビールを飲んでいるのです。両方とも、イスラム教では口にしてはいけないことになっているものです。ところが、同じように禁じられているものでも、豚肉だけは絶対に食べようとしない。「なぜだろう？」と思い、彼らに聞いてみたところ、「あなたは猫を見て食べたいと思うか？ いくら食べて良いと言われても、豚は食べるものではない」という答えが返ってきた。つまり、彼らにとって豚というのは、そもそも食べ物ではないのです。

では、お酒や鱗のない魚介類は良くて、なぜ豚だけ特にそうなったのか。これについて、イスラム教と同じように、豚を食べることを禁じているユダヤ教の人に聞いてみたところ、「反すうしない動物は食べちゃいけないからだ」と言う。牛やらくだなど、反すうをする動物はセルロースを溶かすため、木の葉や草を食べることができる。つまり、人間と食べ物をめぐって競合しないのです。

一方、豚は反すうしないので、木の葉や草を食べることができず、穀物類を食す。つまり、人間と食べ物が競合するのです。中近東はその乾いた土地のために農業ができず、わずかに育つ穀物を育てています。もし、権力者や金持ちが豚肉の味を好み、中東の地で豚の所有を推進したならば、社会的弱者には穀物が行き渡らなくなり、餓死者が出る恐れがある。そのために、宗教で豚肉を禁じたのではないだろうか、と思います。

私たちの文化とは

このように、人間の食文化というのは環境にかなりの影響を受け、その環境の中で長い年月をかけて培われてきました。異なる食文化を「野蛮」と断定し、思考停止をすると、異文化とは「ばかばかしいもの」になってしまいます。常に「なぜだろう？」と考えていれば、どこかでピンとくる瞬間があるものです。

自分たちの文化を見る際にも、同じことが言えます。日本は長い間、農耕生活に基づいた「食文化」でした。そこでは、生産手段（田畑）の移動ができないため、なるべく隣人との争いを避けようとする「まあまあ」、「なあなあ」の文化が育ったのです。日本人はよく「曖昧だ」と言われますが、それは2000年以上前から、農耕という環境の中で育まれた、生活の知恵なのです。

しかし、この50年間で日本の社会構造はがらりと変化して、農耕社会からサラリーマンが中心の社会となった。これは弥生時代から続いた生産手段の変化であり、非常に大きい変化と言えます。文化が環境の影響を大きく受けるものだとすれば、これから我々の文化を決めていくのは一体何でしょうか？ 生きる手段、生産手段を守るために文化が生まれたとすれば、今後の日本における文化の原点は、どこになるのでしょうか？

君たちがどういう文化を創造してゆくのか、非常に楽しみにしています。

講師プロフィール

松本 仁一（まつもと じんいち）：朝日新聞社編集委員。1982年、ナイロビ支局長、1990年、中東アフリカ総局長を歴任。1994年にボーン上田国際記者賞、1996年に『アフリカで寝る』（朝日新聞社）で日本エッセイストクラブ賞、2002年に『テロリストの軌跡』（草思社）で日本新聞協会賞を受賞。その他、『カラシニコフ』、『アフリカで食べる』、『アパルトヘイトの白人たち』等、著書多数。

セクション

「地球家族フォトランゲージ」

ファシリテーター：出口 雅子（ピナツボ復興むさしのネット）

木下 理仁（神奈川県国際交流協会）

ワークショップの冒頭、参加者の緊張感をほぐすために「バースデーライン」というアクティビティを行いました。これは、参加者全員が声を出さずにコミュニケーションを図りながら、誕生日の順に並んでゆくゲームで、初対面の人が多く、緊張気味であった会場の雰囲気や和やかなものになりました。



「地球家族」をテーマにした本セクションでは、世界30カ国のごく平均的な家族と持ち物が写った「地球家族フォトランゲージ版」という写真教材を使用し、「豊かさ」について考えるワークショップを行いました。まず、2人1組のペアを作り、ランダムに配布された1枚の家族写真を見て、その写真から想像されることを2人で話し合いました。右ページのワークシートを使用し、「その写真がどこの国か?」、「家族にとって一番大切なものは何か?」、「一番幸せだと感じるのはどんな時か?」などの問いに、参加者は、自分たちが写真の中の家族の一員になったつもりで答えていました。

次に、2組のペアが集まり4人のグループを作り、お互いのペアが持ち寄った写真を比較しながら、「どちらの家族がより幸せか?」、「自分ならどちらの家族の一員になりたいか?」などについて話し合いました。まるで自分が写真の家族の代表であるかのような口ぶりで、「私の家族の方が幸せだ」と、熱心に語り合う光景も見られました。

最後に、全体で4つの大きなグループを作り、各グループ内で先進国や開発途上国の様々な家族の写真が入り混じった8枚の写真を見比べました。ファシリテーターから「豊かだと思ふ順番に写真を並べてください」という指示が与えられると、家族の服装や持ち物などの「物質的な豊かさ」を基準に並べ替えたグループや、家族の笑顔から読み取れる「精神的な豊かさ」を基準に並べ替えたグループ、そして「豊かさは比べることができない」として全ての写真を円状に並べたグループもあり、それぞれの考え方の違いがよく現れた結果となりました。



参加者はワークショップを通じて、「豊かさ」について深く考え、またその考えを同年代の仲間たちと共有しました。「豊かさ」という根元的な問題を改めて考える機会を得て、また互いの感じ方の違いを認識して、多くの参加者が新鮮な「気づき」を得た様子でした。

「私の家族」ワークシート

- この写真は、住んでいる家の前に、動かせる家具をすべて並べ、同居している家族全員で撮った写真です。
 自分がその「家族」の一員になったつもりで想像しながら、下の欄をうめてください。

国名	
家族構成（動物も含む）	
家族にとって一番大切なものは何ですか？	
家族が今、一番欲しいものは何ですか？	
家族が一番つらいのは、どんな時ですか？	
家族が一番幸せだと感じるのは、どんな時ですか？	

（作成者：出口 雅子）

セクション

「地球家族 ～私の存在、あなたの存在～」

講師：細谷 早里（関東学院大学 助教授）

今日のテーマは異文化理解についてです。異文化に接した時、どういう態度で接していくかを考えていきます。

文化ってなんだろう？

「文化」という言葉を聞くと、すぐに伝統的なものが連想されると思いますが、実際に「文化」が意味する範囲は非常に広いものです。文化とは、ある「集団」が「時間」をかけて育んできたものであり、それは氷山のように、目に見える（可視的な）ものと、目に見えない（不可視的な）ものから成り立っています。可視的なものとしては、音楽、文学、ダンス、料理などがあげられますが、もっと深い部分、不可視的なものとして、意識や間の取り方、意思決定方法、親子関係、友情、教師と生徒の関係などがあります。実際に、異文化間の衝突は、主に不可視的な部分の違いから発生します。目に見えないから説明しにくいし、扱いにくい。だから、なぜ相手が怒っているのかも理解しにくいのです。

異文化に対するステレオタイプ、偏見、差別

異文化に対してはステレオタイプや偏見、差別などの問題がありますが、こういうことはなぜ起こるのか考えてみましょう。

ステレオタイプとは、ある枠組みの中で、ものを固定化して見ることです。これは物事を類型化することですから、その集団の行動を予測することが可能になるという利点もありますが、その集団内における個性が無視されるのが問題です。例えば、関西人だからといって常に面白いことを言うわけではないのです。偏見とは、あるグループに対する誤った決めつけです。偏見にはいくつかレベルがあり、陰口をたたき、無視する、という順番に発展し、差別につながります。さらにこれが発展すると、身体的な攻撃になります。また、無知から生まれる偏見もあります。

最近では、ステレオタイプの形成には、マスコミの影響力が非常に強くなっています。私たちはいろいろなことを知る努力をしなければなりません。

「豊かである」とは？

皆さんが先ほどのワークショップで「豊かさ」を問われたとき、「心の豊かさ」を挙げている人が多く、意識の高さに驚きました。豊かさのひとつに「心の豊かさ」を挙げられるのは、日本が物質的に豊かになったからだと思います。

以前、私がバングラディッシュで、ある老人の写真を撮ろうとした時、彼は私の同行者の腕時計を借りたいと言ってきました。自分が豊かであることを示すため、腕時計をつけて写真に写りたがったのです。つまり彼にとっては、物質が豊かさのシンボルであったのです。日本は物質的に豊かであるため、着るものや身につけるものは、個人の選択の問題になっています。しかし、発展途上国では、その人の身につけているものが、そのまま直接的に豊かさの度合いを表すことがあるのです。

「日本文化」は特殊か？

よく「日本文化は特殊である」と言われます。しかし、決して日本だけが特殊ではなく、全ての文化が等しく特殊なのです。文化はどの切り口で見るかによって、その共通性や異質性が違ってくるのです。また、文化の多様性を考えるときに、二つの見方があります。一つは、所属しているグループで分けること、そしてもう一つは、同じグループ内の違いを見ることです。だから、多様性とは、ただ「グループが違っているから」ということではないのです。

今、世界は相互依存関係で成り立っており、お互いが助け合わないとやっていけなくなっています。多様性を認めることは、他の人とは異なる自分自身を認めることでもあります。これは究極的には「個人の幸福」のためです。みんなと同じでなくても良い、ということですね。また、異文化を見ることは自文化を見直すことにつながり、それは自分の人生を修正する機会を得ることでもあります。

国際人として生きる

国際社会で生きるには、知識、態度、技能、行動が必要となってきます。その中には、怒りを抑えることや、自分を受容できることなども含んでいます。海外に行く際に重要なのは、英語ができることではなく、こうした適応力を持っていることだと思います。また、例え英語ができたとしても、「英語がしゃべれるから現地語を覚えなくても良い」と考えないでください。誰でも相手が自分の言葉を少しでもしゃべってくれれば、より心を開く気持ちになるからです。

異文化間での対立が起こった場合、どう対処すれば良いでしょうか。望ましい解決方法は、「融通」ではなく、「協同」です。「融通」では自分の意見を押し殺してしまいますので、最終的にフラストレーションがたまってしまいます。また、相手が問題を抱えていた場合には、ただ「同情」するのではなく、「私には良くわからないけど、多分こうなのでしょうね」という「共感」を持って接する態度が重要だと思います。

異文化理解はなぜ必要なのかというと、ここがスタートポイントだからです。身近なものから始めて、世界を知り、自分が何をしなければならないのか、何ができるのかを考える、「ローカル to グローバル to ローカル」で異文化理解を進めてください。また、異文化理解から、最終的には自分自身の内面に戻って、自分の人生を考えることも大切なのだと思います。

・質疑応答

Q.私の友人が、「ヨーロッパでは日本人は下に見られている気がした」と言っていました。もし自分が相手からそういう位置付けされた場合、どう対処したら良いでしょうか？

A.私にも同じような経験があります。レストランに入ると、いつも入口やトイレの近くに案内されている気がしたのです。それである時、「こっちの席に座りたいのですが」と話してみたら、そちらに座らせてくれました。やはり怒るだけじゃなくて、まずは話してみることが重要なのではないかと思います。

セクション

「豊かかってなに？ ～安心できる世界～」

講師：勝俣 誠（明治学院大学 教授）

国際人の条件とは？

僕が思う国際人の条件は、まず「挨拶ができる人」です。あるアフリカの国に行って、通りがかりの人に直接道を聞いたら、まず挨拶してから、道を聞きなさいと注意された経験があります。20年以上も前、西アフリカをアフリカ人と初めて2人で旅行したとき、車を運転するこのアフリカ人が行く先々で通行人に道をたずねる度に、「お元気ですか？」、「お父さんは元気ですか？」、「おじいさんは元気ですか？」と聞くので、ずいぶんと親戚が各地に多いのだなと思っていたら、彼は見知らぬ人に道を聞いていたのですね。必ず挨拶をしてから、道を聞く。挨拶がセットになっているのです。乗合バスに乗る際にも、僕が乗る時に乗客に「おはようございます」と言うと、一斉に合唱のような挨拶が返ってくる。挨拶というのは、相手を「情報を得る手段」ではなく、まず人間として認めることだと思います。

もう一つエピソードがあります。国際文化会館館長の松本さんという方が、僕がアフリカに旅立つ際に、「朝会った時に、挨拶に加えて、相手の名前を呼びなさい」とアドバイスをしてくれました。僕は、松本さんはもっと難しいことを言うのだろうなと思っていましたが、大切だと言われたのはそういう基本的なことだった。相手の名前を覚えることは非常に大切です。

あと、海外ではホテルなどエレベーターの中で一緒になったとき、他人同士でも小さい声で挨拶をすることが多い。知らない人であっても、「こんにちは」と挨拶する。日本人はこれをまずしない。パリのホテルで、日本人の団体の方からすでにエレベーター内にいた僕に話しかけられたことがありましたが、その時の言葉は「上か、下か」という二言だけでした。

「豊か」であることとは？

では、「豊かさ」についてということですが、自分は二つだけ言いたいと思います。第一に、ある困難にぶつかった時に、それを乗り越えられる人は豊かだと思います。第二に、自分が受けた苦勞や苦しみを許し、「自分が苦勞したのだから、お前も苦勞しろ」としない、仕返しをしないことが豊かさです。例えば、アフリカ人に「白人が憎いか？」と聞くと、「許すべきだ」と彼らの多くは言うのです。「白人も恥ずかしいと思っているだろう。だから追求しようと思わない」と。

この二つを考えるために、ちょっと音楽を聴いてみましょう。一つはキューバの音楽です。キューバ人は6、7割が黒人とその混血なのですね。そこで10年前にヒットした映画、「ブエナビスタ・ソシアルクラブ」からの音楽です。テンポの良いサルサ調の音楽ですが、良く歌詞を見ながら聴いてください。

《音楽を聴きながら》これは何の歌ですか？これは、アフリカの奴隷貿易でキューバに連れてこられた黒人の話ですね。黒人の人はつらいから、山の方に逃げるんですね。「山に向かっていこう」、「自由がないと俺は生きていけない」と。自由になるためには戦わなければいけない、自由になるためにもものすごい苦勞した、というメッセージです。

もう一曲。これは聞いたことがある曲かもしれませんが、ボブ・マーレイの「バッファローソルジャー」です。

《音楽を聴きながら》バッファローソルジャーとは連邦軍の「混成部隊」のことです。「なぜ俺はこんなところにいるのだ？」という、奴隷貿易の歌ですね。「stolen from Africa・・・」、つ

まり「アフリカから盗まれ」で、アメリカに連れて来られたのだと。でもこれは奴隷貿易が悪いという恨みの歌ではなく、こんなにがんばって生きてきたという歌です。

今やるべきこと

最後に、皆さんに伝えたいことを。皆さんは高校生ですから、知識だけではなく、基本的なものの見方を大切にしたいのです。

1. 身近なモノやコトに素朴な疑問を持ち、その背景を探り、世界の様々な出来事と結びつけてみる。
2. モノやコトの相互の結びつきを分析する力を学ぶこと。
3. 五感を駆使して歩き、考え、そして歩くこと。体を動かすということが必要です。
4. 日本語と英語以外に第三の外国語を少しでも学ぼうとすること。地域の言語を覚えるのは、相手に対する敬意。三つ目の言語をやることで、世界が一層広がり、更に相手の地域の中に入っていける。

・質疑応答

Q.先生がアフリカを学ぶきっかけとなったのは？

A.アフリカを選んだのは偶然です。フランスに留学していたとき、アジアを経済学の分野から見ようと思っていた。クラスには途上国出身の学生が多かったが、アフリカの話はピンとこなかった。ある時、先生が「一番難しい問題のあるところを研究として選びなさい」と言っていたので、アフリカへ行った。あとは、カリフォルニアで出会った西アフリカの人が興味深かった。「この人の国に行ってみたいな」というのも頭の片隅にあった。

Q.サルサやレゲエは、苦しい体験を歌っているのに、どうしてあんなに明るいメロディーなのですか？

A.むしろ苦しかったからこそ、明るい曲になったのだと思う。歌うことで、苦しみを乗り越えたのではないのでしょうか。

Q.アフリカに行くと、豊かだと感じますか？

A.それはそうですね。所得が20分の1だからといって、人格が20分の1ということではありませんね。喜びというのは、彼ら自身の生活にある。日本の大学生は「アフリカは貧しい」と教えられてきたので、実際に現地に連れて行くと「どうしてこんなに生き生きしているのだろう？」と混乱するわけです。むしろ日本の方が、物質的に豊かなはずなのに、自殺者が多いとか。

Q.アフリカ人が白人を許すという話がありましたが、どうして相手を許す態度ができるのでしょうか？

A.これはアフリカ人だけでなく、いろんなところで見られるのです。例えば、「9.11 テロ」で自分の子どもを失ったアメリカ人で、各地をまわって「報復しないで」と講演した遺族の方もいる。南アフリカのマンデラ大統領も「許しの論理」を以って、白人と共に歩む「新しい南アフリカ」づくりの政治に携わった。これは高度なモラルです。

セクション

「バングラデシュの開発を考える9つの方法」 ファシリテーター：出口 雅子（ピナツボ復興むさしのネット） 木下 理仁（神奈川県国際交流協会）

参加者はまず、バングラデシュの人々の生活取材したドキュメンタリービデオを見ました。大雨で河川が氾濫するたびに農地が流され、新たな耕地を求めて危険な川の中州に移住せざるを得ない農民の状況など、バングラデシュには貧困に苦しむ人々の生活があることを知りました。



その後、「バングラデシュの開発を考える9つの方法」というワークショップを行いました。これは、右ページのワークシートにある、バングラデシュの人々が置かれた状況を改善するための9つの方法を検討し、それらに優先順位をつけるアクティビティです。まず参加者一人ひとりが自分の考える優先順位をつけた後、数人のグループに分かれて互いの意見を交換し合いました。グループ内でそれぞれの優先順位があまりにバラバラで、「同じ日本で育った高校生なのに！」と驚きの声を上げる

参加者もいました。また、会場全体で意見の共有を行った際には、「もっと知識や技術が必要だ」、「まずは足元から考えるべきだ」、「援助によって現地の食文化を壊すことも考慮すべき」といった意見が次々と出された他、与えられた9つの選択肢の他に、「自分が現地に行って、実際に見て考える」という選択肢も提案されました。

参加者同士の意見交換がひと段落した後、実際の援助について知るため、ある日本のNGO団体のバングラデシュにおける活動を紹介するビデオを見ました。ビデオでは、女性の地位向上を目的とした、「ショミティー」と呼ばれる相互扶助グループの活動支援や、ストリートチルドレンの自活支援センターなどが紹介されました。初めてストリートチルドレンの存在を知り、彼らのインタビューの様子を見て涙ぐむ参加者もいました。



最後に、ワークショップやビデオで学んだことを参考に、少人数のグループで「国際協力」について話し合いました。会場全体で意見を共有した際には、「支援がいらなくなる支援が必要だ」など、意識の高さを伺わせる意見も出ていました。また、実際に国際協力ボランティアを実践しているという参加者からは、「大人」ではなく「高校生」ができる支援の重要性が強調され、その実践例が紹介されるなど、参加者同士が大いに刺激を与えあう話し合いの時間となりました。

Bangladeshの開発を考える9つの方法

「南」の国の開発問題に、私たちはどう関わるべきなのか、を考えてみよう。

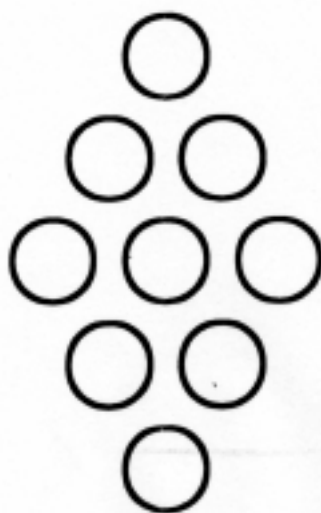
以下に、Bangladeshの人々が置かれている状況を改善するための9つの方法が記されている。これらは、問題認識も視点も方法もバラバラであるが、しかしいずれも私たちが、何らかの形で関わることでできる行動である（例えば、ODAについても、新聞に投書し、世論を喚起するということはできる）。

これらの行動の順位づけをしてみよう。

いちばん重要なこと、最初にすべきことを最上段の○の中に記入し、次にすべきことを2段目に、以下、もっと遅くてよいこと、あるいはもっともすべきでないことを最下段の○の中に記号で書き入れる。

個人で記入した後で、隣の人とあるいはグループで意見交換して、結論を出してみよう。

- A Bangladeshの産物（ジュートや米）を日本に輸入する
- B Bangladeshの工業基盤を整備するために道路や港湾施設を作るプロジェクトに日本のODAを供与する
- C 日本の国内においてBangladeshの実状を正確に伝えるような広報、教育活動を行う
- D 毎年起きる洪水の時期にBangladeshに日本の食料を送る
- E 農業に代わる産業の技術者を養成するためにBangladeshから日本に研修生や留学生を受け入れる
- F 資源や食料を節約するなど日本で私たちの消費生活を見直す
- G Bangladesh政府への政府開発援助（ODA）を削減する
- H Bangladeshの農村開発を行う民間開発団体（NGO）に資金を提供する
- I Bangladeshの農業研修センターに日本のODAを供与する



（出展：『参加型学習で世界を感じる～開発教育実践ハンドブック』開発教育協会発行 2003年。）

セクション

「豊かかってなに？ ～安心できる世界～」

講師：旦 祐介（東海大学 教授）

人間の安全保障のお話をする前に、「Richness = Diversity + Human Security」が意味上で成り立つものなのかを最後に聞きます。これが今日のテーマの一つです。

文化の多様性

昨日、みなさんの話を聞いていて、帰国子女の方が10名くらいいらっしやった。その方が日本に戻ってくる際に、困難さやコンプレックスを持っていることがわかった。逆に、帰国子女じゃない人は、「英語ができて良いなあ」という、逆コンプレックスを持っていたりする。このことは、Diversity(多様性)に関わってくると思います。日本社会というのは、ある条件の人間には厳しい社会で、他者を排除したり、多様性を認めないところがあると思います。だから、海外に行くことより、帰ってくる時の方が難しかったりするのですね。

イギリスに住んでいた頃、デザートに温かいカスタードをかける習慣に慣れるのに3年かかった。多様性を受け入れることが大事ですが、でもそれはけっこう大変なことです。自分の育った環境を守る方が楽ですから、ある意味では生命体として当然。しかし、「ずっとそうやって良いのでしょうか？」というのが問題提起です。

「国」と「安全」

「一国幸福主義」という熟語をつくりました。日本という国だけが幸福ならよいのでしょうか。皆さんは、今まで当然だと思っていたことを疑うことはありますか。「人間の安全保障」という話につながりますが、皆さんにまず疑って欲しいのは「国」というものです。

人間の安全保障という言葉は、「人間+安全保障」という言葉の組み合わせからできています。それぞれの言葉の語源は古いものの、この組み合わせは生まれたのは10年くらい前なのです。それまで安全保障といえば、「国家」の安全保障のことでした。国の安全を守ることが唯一の関心事だったのです。

でも、国際社会では、国が守られても、国民が守られないということが相当たくさんある。国民の安全保障と国の安全保障が乖離してしまっている例が増えているのです。そういう国を破綻国家、或いは失敗国家とも言います。例えば、ルワンダでは、ある部族を扇動して、それまで一緒に住んでいた違う部族を大虐殺したことがあります。この時、ルワンダという国家は大虐殺から国民を守らなかった。

他にも、人身売買というものがある。実は、国際社会ではこの言葉が日本に対しても使われています。これは日本人の売買ということではなくて、主として東南アジアの人たちのことです。ブローカーが女性をだまして連れてきたりして、日本の法務省はビザを出しているという実情がある。

人間の安全保障

それでは、現代社会における望ましい価値観はどういうものなのか。これが「人間の安全保障」ということです。先ほど、NGOの活動を紹介するビデオで、ストリートチルドレンの女の子を見て思わず涙が出てしまいました。あんなことが、例えば家族や友達の上の上に起きたら、こんな

ひどいことはない。しかし、それが日常的になっている場所があるのです。今、ここでこうして話している30分の間、ダッカではストリートチルドレンが何人死んでいるのかを考えると……。それは途上国だけでなく、先進国の中にもあります。例えばアメリカ合衆国では保険が高く、手術が受けられない人が非常にたくさんいたりする。

「人間の安全保障」は、「万人に対して基礎的なものが与えられるべき」という考え方であって、国連憲章などでも目にします。それは、ビデオに出てきたストリートチルドレンの女の子にも与えられるべきものですが、彼女がそもそも、「自分には安心を得る資格がある」と考えているのかは疑問です。明日の食べ物の心配をしなくても良いという安心感を得て欲しいと思います。

“Empower”という言葉に注目してください。これは大事な言葉です。日本語訳はまだありませんが、「パワーを与える」、「力づける」といったような意味です。実際に人々をエンパワーする一つの例として、「グラミン銀行」があります。日本でも、銀行というのはなかなか女性にお金を貸さないものですが、バングラディッシュではなおさらです。しかし、女の人が会社を起こして、自立することが大切だと考えたグラミン銀行が、女性のチームにお金を貸し始めました。実際に、一般の銀行の貸し倒れ率は8から10%なのに対して、グラミン銀行は2%だけなのです。つまり、きちんと返済されている。これこそ、エンパワーメントの非常に良い例です。

なぜ日本は難民を受け入れないのですか？と外務省や法務省に質問すると、「日本国民が受け入れたくないからです」という公式見解があるのですね。これは皆さんにも、本当にそうなのか、考えてみて欲しい問題です。そして、「Richness = Diversity + Human Security」は成り立つか、ぜひ考えてみてください。

・質疑応答

Q. ストリートチルドレンが保護施設に入ることによって労働の機会を失い、その家族の暮らしが成り立たなくなる恐れもあるのではないですか？

A. 非常に良い質問です。これは本当に難しい問題なのです。実際に、ある会社でも児童労働に対して批判が高まった結果、働いていた子どもたちは雇用の機会を失い、ストリートチルドレン、または売春婦になるわけです。この対策として、最近では、半日働いて、半日は工場に併設した学校に通わせるという会社もあります。

Q. 日本の国として、政府として、難民の受け入れを拒絶する本当の理由は何でしょうか？

A. 日本というのはどういう国なのか、そして100年後にどういう国になっていきたいのかというビジョンが、少なくとも僕と官庁・役所とは異なる。「日本の伝統」を大事にしたいので、それを変えたくない人が多いのではないかと思う。しかし、「日本人」とか「日本語」というのもひとつのフィクションであり、決して何か一つの単一的なものがあるわけではないと、僕は思っています。

Q. 多様性があることによって、摩擦が生まれるという側面があると思いますが、安全保障と多様性とは、同時に実現可能なのでしょうか？

A. 困難ではあるが、可能だと思います。少なくとも、こういうものを目指して、みんなで進む方向性としては、悪くないと思います。

セクション

『目に見えないもの』を考えよう ~グレート・アイディアズへのいざない~

講師：江藤 裕之（長野県看護大学 助教授）

皆さんは昨日から「国際」や「異文化」について学んできました。このセクションでは、どちらかと言えば皆さん自身の「異文化体験」、今まで気がつかなかった心の中にあるものを見ていきましょう。そして、「目に見えないもの」を考えるにはどうした良いのだろう、ということを考えてみましょう。キーワードは「かたち」です。

「a」と「the」、「犬」と「ポチ」

皆さんに事前を書いてもらったプレ・クエスチョンで、「これは椅子です」、「これは水です」を英訳してもらいましたね。This is a chair. This is water. これは、英語の冠詞についての知識を確認したかっただけです。例えば、ここにある椅子をバラバラにして、背もたれだけを見て「椅子だ」と言わないですね。a chair と a がつくのは、ひとつのまとまった形があるからです。それがこれ以上分けられないのです。逆に水や紙は、どんどん割っていても水のまま、紙のままですよ。だから a water や a paper とならない。a が無いものは、それをいくらでも分けられるからなのです。

しかし、普通 a をつけないものに無理やり a をつけると、それが具体的なものをあらわすようになるのです。例えば、a paper は「紙」ではなく、「書類」や「論文」というひとつのまとまったものになります。a がつくると、具体的に形があるもの、または具体的な形が想像できるもの、ということ覚えておいてください。

では次の問題。a と the の続きについて。皆さんが描いた犬の絵を見てみましょう。

《スクリーンに参加者が描いた犬の絵がいくつか映し出される》

ここに描かれているのは全部犬ですね。でも描かれている絵の一つひとつは、それぞれ全部違います。どうやら、われわれの頭の中には、それぞれの形はちがうものの、なにか「犬」という共通イメージがあるようですね。自分のペットの犬に「イヌ」という名前をつける人はいませんよね。「犬」は種のことを表し、「ポチ」や「シロ」というのは別個のものを表している。ポチもシロも「犬」ですが、それぞれが違う犬ですね。つまり、ここで皆さんにわかって欲しいのは、物事にはアイデアや概念などの General なレベル（これが the dog）と、現実世界に存在する個別としての Special なレベル（これが a dog）がある、ということです。

プラトンを読んで考える

さて、「犬」や「本」は思い浮かべようと思ったら、イメージできますよね。でも「真」、「善」、「美」といったものはどうですか？「キレイ」に形はありますか？「さっき道端に親切が落ちてたよ」とは言いませんね。しかし、私たちの頭の中には「きつとこういうものではないか」という共通理解があるはず。ここでプラトンの『メノン』の一説を、みんなで輪読してみましょう。さて、ここで書かれていることの主題はなんですか？

《『メノン』の一部を輪読した後、グループでこの文章の主題は何かを話し合う》

ここでは「徳」とは何かということについて、メノンとソクラテスが問答をしていますね。この文章は、今から2000年以上前にギリシャで交わされた会話であって、我々とは時間的にも空間的にも離れています。しかし、ここから私たちが学ぶことがある、或いはヒントにできる、だ

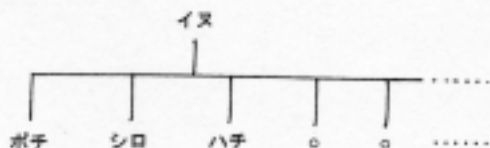
湘南国際村青少年国際セミナー

Session III: 「目に見えないものを考えよう——グレート・アイディアズへのいざない」

平成17年3月28日 (by H. Bao)

2. 「形 (shape)」と「型 (form)」 / 「個 (particular)」と「普遍 (universal)」

〔図1〕



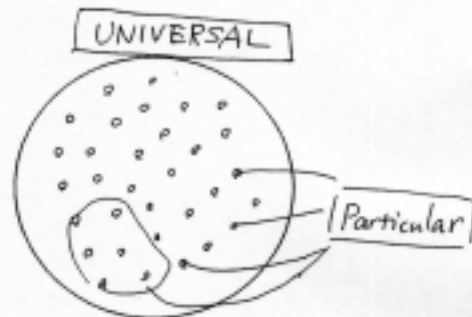
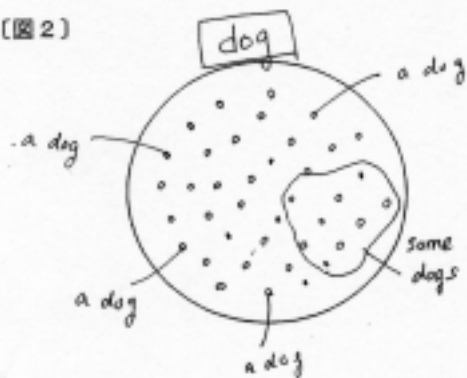
種としての general なレベル (the dog)

- アイディア・概念としてのイヌ
- 基準となる「型 (form)」を示す

個別の special なレベル (a dog)

- 現実世界のイヌ
- 具体的な「形 (shape)」を持つ

〔図2〕



3. プラトン『メノン』より (→資料1)

4. Mortimer J. Adler (1902-2001) とグレート・ブックス・セミナー
・ビデオ「Adlerからのメッセージ」

5. グレート・ブックスとグレート・アイディアズ (→資料2)

6. リベラル・アーツ教育と教養 (→資料2)

(作成：江藤 裕之)

から、こうして今まで残っているはずで。

メノンは「徳」について、人それぞれに合ったいろんな「徳」が存在すると言う。それに対してソクラテスは、いろいろな数多くの種類の「徳」があるとしても、それらを総称して「徳」というカテゴリーに入る以上、そこには共通するなんらかの「本質的特性」があるはずだと言う。そしてその本質的特性を明らかにすることが、「徳とは何か？」という問いに答える正しいやり方だと言うわけですね。先ほど勉強した「個」と「全体」というのが、この文章の中にもあります。

リベラル・アーツについて

資料の中に、「リベラル・アーツ教育と教養」というのがあります。そもそも Liberal Arts ということばの、「Art」とは何ですか？「美術」とか「芸術」ですか？ 実は、これはむしろ「技」とか「術」ということです。「Art」というのは、何らかの人間の手や精神が加わったものごとと捉えてください。だから、偉大な芸術家の創った作品には、偉大な精神が反映されているから、見ていてすごいのですね。この「Art」に対する概念は「Nature」です。これも「自然」と訳してしまうと良くわからない。「本性」とか「本質」ということです。「Liberal」は「自由」ですね。

次に、「余暇 (leisure)」について考えてみましょう。余暇というのは、仕事、労働の反対のことですが、「余暇」とか「暇」といった言葉は、日本語では悪いイメージがありますね。イソップ物語の「アリとキリギリス」では、だいたいキリギリスが悪者ですね。ところがある文化圏、どちらかというとな欧のカトリックの人はキリギリスの生き方を推奨しています。私は知り合いの神父さんからこれを聞いて、カルチャーショックを受けました。古代ギリシャやローマでは余暇が中心で、暇の無い状態が仕事、という価値観の時代でした。

スクールという言葉は、ギリシャ語の「スカラー」から来ています。つまり、暇な人が学校に行くのですね。古代のギリシャとかローマでは暇が中心で、暇じゃない人が働くということだったので。ギリシャには、奴隷と呼ばれる、専門的な職業をする人がいた。そしてその奴隷に対して仕事から解放された人、つまり仕事しなくても良い人のことを、リベリと呼んだ。つまり、リベラル・アーツというのは、労働を特にする必要のない人たちが自由な時間をふんだんに使って、政治を考えたり、幸せとか徳について考えたりしたことが始まりです。

「グレート・ブックス」という方法

これから皆さんが大学に進学すると、法律、経済、経営など、個別の学問を専攻しますね。これらの学問が「個別」だとすれば、それをひとまとめにする「全体」としての「一般教養」がある。法律学と経済学では「良いこと」は違うかもしれないですね。そういう個別のことをまとめる円として、リベラル・アーツがあるのです。

みなさんがこれから生きていく上で、抽象と具体、全体と個別をいったりきたりできる人間が理想だと思います。目に見えるものしか信じないというのはダメですし、夢ばかり見ていると困ります。この二つの間を行ったり来たりする勉強、或いはそういうふうなことを考える習慣をつけてください。

その学びの手段の一つに、「グレート・ブックス」というものがあります。これは、現在まで読み継がれてきた「古典」をじっくりと読み、読者間で対話をしながら「古典」に学ぼうとするものです。この方法の生みの親である、シカゴ大学のモーティマ・アドラー博士は、「人間 (body with mind) は天使 (mind without body) と動物 (body without mind) の中間的存在である」と言っています。Body と Mind の二つの面を両方大切に、抽象と具体を行き来するような、そういった考えを身につけて欲しいのです。

リベラル・アーツ教育と教養

リベラル・アーツ

・自由7学芸

基礎3科 (trivium): 文法、弁証 (論理)、修辞——言葉に関する技

4科 (quadrivium): 代数、幾何、音楽、天文——自然を読み解く技

- ・個別領域のプロフェッショナルを育てる専門教育に対して、普遍的価値や普遍的問題を追究 (「具体」 ↔ 「抽象」, 「個別」 ↔ 「普遍」)

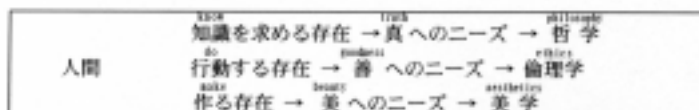
- ・民主主義の基礎、基本的人権としての生命・自由・幸福追求を考える手段

- ・リベラル・アーツとは諸学の基礎となるような原理的なものの見方、考え方を習得することを目標とし、すべての学問に共通する本質的事項の理解を推進するための基礎教育。

「余暇 (leisure)」の意味

- ・スコレー (skhole) とアスコリア (askholia)
- ・オーティウム (otium) とネゴティウム (negotium)
- ・テオリア (theoria) と contemplation (観想)

「真」「善」「美」——よく生きるために必要なもの



Mortimer J. Adler, *Aristotle for Everybody*, Touchstone, 1978.

[邦訳、下島達、若林彰、みんなのアリストテレス、日本ブリタニカ社、1978.] より

天使と動物の間にある人間

- ・ body without mind → もの (生物・物体) / mind without body → 天使 / body with mind → 人間
- ・精神の鏡であり、また、自己表現の媒体としての言語を大切に

「教養」とは

- ・ culture / cultivate

- ・自らを立てる、揺るがない自分を造り上げる、自分に対して用を渡し、その用の下で行動できるだけの力をつけることに必要なものが「教養」(村上陽一郎『やりなおし教養講座』NTT出版)。

- ・特別の教育を受けたわけでもない人たちでも、自分の中にきちんとした規範を持っていて、そこからはみ出したことはしないぞという生き方のできる人こそが、最も原理的な意味で教養のある人(同上)。

- ・「いかに生きるか」への問いが「教養」の始まり(阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書)。

- ・精神の自由 / 常識や既存の考えを「なぜ」と疑う

(作成: 江藤 裕之)

調べて話し合おう・グループ発表・修了証書授与式

調べて話し合おう

参加者はくじ引きで5人1組のグループを作り、「セクション」のフォトランゲージで使用した写真の国々について調査しました。インターネットや関係図書資料などを活用し、時には大学生アドバイザーの力も借りながら、自分たちで決めたテーマに沿って作業を進めました。

与えられた国の中には、国名自体あまり耳慣れないものもありましたが、メンバー同士協力し合いながら、貧困や宗教対立といった各国が抱える個別の問題について深く調べてゆきました。

〔課題国〕

アメリカ、イスラエル、グアテマラ、
タイ、中国、西サモア、ハイチ、
ブータン、ベトナム、マリ、南アフリカ、
モンゴル（計12ヶ国）



グループ発表

最終日の朝、各グループは「調べて話し合おう」の時間でまとめた成果をステージ上で発表しました。発表内容の深さもさることながら、模造紙やパワーポイントを活用しての説明や、自作した寸劇によってその国の生活ぶりを紹介したグループもあり、それぞれが非常に個性的な発表となりました。



修了証書授与式

セミナーを修了した証として、セミナー企画委員から参加者一人ひとりに修了証書が手渡されました。修了証書を手にした参加者は皆満足げな表情を浮かべ、2泊3日間で得た貴重な出会いや学びを改めてかみしめている様子でした。



第1回湘南国際村青少年国際セミナー
報告書

平成17年12月

発行 財団法人かながわ学術研究交流財団
〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口 1560-39
湘南国際村センター内
TEL:046-855-1822 FAX:046-858-1210
ホームページ: <http://k-face.org>

